

第六十一回（令和七年度）

彦根市民文芸作品

入賞作品集

彦根市

彦根市教育委員会



彦根市民憲章

豊かな自然と歴史遺産に恵まれた彦根市に住むわたくしたちは、先人のたゆまない努力によって築かれた郷土に誇りと責任をもち、風格と魅力のある都市を創造していくために努力します。

わたくしたち彦根市民は

- 郷土を愛し、
水と緑の美しいまちをつくります。
- 歴史と伝統を生かし、
文化の香り高いまちをつくります。
- 人権を尊び、
お互いに助けあい、信頼しあうまちをつくります。
- 心とからだを鍛え、
働く喜びに満ちたまちをつくります。
- 若い力を育て、
夢と活気のみなぎるまちをつくります。

(昭和52年2月11日制定)

『まえがき』

彦根市長 田島 一成

彦根市民文芸作品入賞作品集も、今回で六十一回目の発刊を迎えることとなりました。

長きにわたり継続できましたのも、本市はもとより、近隣の市町から関心を寄せ、多数ご応募をいただいた皆様の熱意と意欲の賜物であると深く感謝申し上げます。

本年度は、運営方法等を見直し、皆様にご負担をおかけすることになりました。こうした影響もあり、応募者数は減少こそしましたが、お寄せいただいたそれぞれの作品は、日々の暮らしの中で抱いた深い想いや、言葉に対するひたむきな姿勢が滲み出たものばかりで、彦根市民文芸の底力を示すものであると、あらためて感じたところです。

一方で、今後は若年層の参加を促す工夫や、世代を問わず表現の喜びにふれられる取組が課題だと受け止めております。身近なテーマや新たな発表の機会を模索しつつ、次の世代にも文芸文化が受け継がれ、持続可能な文化活動となりますよう、取り組んでまいりたいと存じます。

最後になりましたが、彦根市民文芸作品の継続と発展に多大なるお力添えをいただきとともに、応募作品と真摯に向き合い、丁寧に審査いただきました選者の皆様に心からお礼を申し上げ、発刊に寄せる言葉とさせていただきます。

令和七年八月

目次

あ と が き	小 説	随 筆 ・ 評 論	詩	冠 句	川 柳	短 歌	俳 句	ま え が き
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
29	27	22	17	14	11	7	3	1

○応募者数・応募点数および入賞者数

	応募者数	応募点数	入 賞 数			
			特 選	入 選	佳 作	合 計
俳 句	45 人	135 句	3 句	12 句	9 句	24 句
短 歌	25 人	75 首	3 首	6 首	5 首	14 首
川 柳	30 人	90 句	3 句	6 句	7 句	16 句
冠 句	33 人	99 句	3 句	5 句	10 句	18 句
詩	9 人	14 編	2 編	2 編	3 編	7 編
随筆・評論	12 人	12 編	1 編	2 編	3 編	6 編
小 説	1 人	1 編	0 編	0 編	1 編	1 編
計	155 人	426 点	15 点	33 点	38 点	86 点

○選 者

部 門	選 者	部 門	選 者
俳 句	秋口 大門・北川 栄子・吉永 幸司	詩	石内 秀典・尾崎 与里子・山本 英子
短 歌	河分 武士・澤 絢子・宮本 照男	随筆・評論	竹中 圭子・藤本 弘子・山口 一
川 柳	重森 恒雄・峯 裕見子	小 説	井上 次雄・杉山 啓志
冠 句	小森 和美・田中 二天・西村 吟雪		(五十音順・敬称略)

俳句

秋口大門
北川栄子
吉永幸司
選

特選 手の甲に看護のメモや夜の秋

西今町 松本トシ子

(評) 晩夏の夜、生死を彷徨う医療現場は忙しい。手の甲は一枚の記録として書き込まれ、看護師の慌ただしい時間は過ぎてゆく。現場の臨場感を垣間見る。

(大門)

特選 木の芽風ジャズセッションの軽やかさ

京町三丁目 林 尚子

(評) 冷たく寒い冬の季節が過ぎ、暖かい春風と共に木々の芽吹きが始まる。人の心も弾み、戸外へと眼が向けられる季節でもある。音楽もその一つであり、軽やかなジャズを聴くと身体が自然に動き、リズムを取りはじめたかのように思う。

(栄子)

特選 大琵琶にかけ橋結ぶ時雨虹

米原市 田辺仁美

(評) 琵琶湖は虹が出やすいと言われています。山に囲まれていて、にわか雨が多いからだそうです。この日も「かけ橋」のように大きな虹が出たのでしょうか。近江が誇る琵琶湖を愛する気持ちが新たに生まれたのです。

(幸司)

入選 万緑の押し上げている天守閣

高宮町 前川菅子

(評) 山城の天守閣を夏の深い緑が空に押し上げているのだ。彦根の玄宮園から見る天守閣の風情だろうか。城の森にはさまざまな鳥の声が聞こえる。

(大門)

入選 参道の鎮もる長さ杉落葉

後三条町 秋山正子

(評) 虚子の句に「杉落葉して境内の広さかな」がある。杉と言うと樹齢何百年の大樹が想像される。歴史のある神社仏閣であればあるほど、厳かさが感じられ、歩くうちに参詣の心が引き締まりゆく様に感じられる。

(栄子)

入選 水入りて突如代田の宇宙めく

日夏町 林 正子

(評) 収穫の秋から冬にかけて手を入れてこなかった水田でした。気が付けば、代掻きが終わり、水が入れば田植ができるばかりになっていました。そこに、突如、水が入ったのです。今までと違う風景を「宇宙めく」とした発想が見事です。

(幸司)

入選 うなづくも言葉のひとつ日向ぼこ

西今町 前田弘子

(評) 冬の日差しは少ない。この恵みの暖かさに会話の弾む縁。しかし、その会話も日に溶けるように弛んでゆく。話を聞きながら聞く姿が浮かぶ。至福の所作である。

(大門)

入選 雨一と日木の芽静かにほぐれけり

日夏町 寺村 房子

(評) 一日ごとに進みゆく春を慈しむような雨であり、この雨からは昏さが感じられない。
手入れされた庭の木々も、しつとりと暖かい雨に促される様に芽吹きを始めたのだ。芽吹きには日差しだけでなく、雨も大切な役目を持っている。

(栄子)

入選 悴みし一日を解きし湯船かな

後三条町 北村 しげ子

(評) 朝から多忙だった一日が終わりました。ほっとする時間。それが湯船です。家の内外の仕事が何であれ、その日は手足が凍え、思うように動かなくなる位の寒さが「悴みし」です。お疲れ様と労いたい気持ちです。

(幸司)

入選 春風に吸ひ込まれゆく打球音

芹橋二丁目 秋山 栄子

(評) 冬から解放されて春になりました。甲子園の高校野球からプロ野球。あるいは大リーグまで野球への関心が高まっています。夢を追いかけて楽しむ野球少年達の鼓動の響きでしょうか。「打球音」が印象に残りました。

(幸司)

入選 靴底の泥かき落す竹の秋

大藪町 吉田 和治

(評) 竹の秋は春の季語、もう筍の芽が顔を出す時期。そんなころの竹藪は雪が解けてぬかるむ。いつのまにか靴底に泥がついて歩行を妨げる。その泥を丁寧に拭う。「春泥」という季語もあるが、十分に春の景が伝わる句となった。

(大門)

入選 憂きことのなべて包むや今日の月

東近江市 坂口 靖子

(評) 今日の月は中秋の名月。名月の静かに地上を照らす光。確かにここ鎮まる一時である。憂きことの多き世界を包むように月は私たちを心穏やかにしてくれる蕪村の「月天心」の句を想起させる句。争いや国々の戦、月は地の穏やかな気持ちを取り戻すことひたすら願い優しい光を投げかけている。「なべて包むや」に感無量の言の葉を感じる。

(大門)

入選 風薫る心膨らむ五感かな

正法寺町 金子 君子

(評) 五感は、視・聴・嗅・味・触の五つの感覚を言う。軽やかな清々しい初夏の風を、胸いっぱい吸った時の心地良さが解かる気がする。身体全体で心地良い風を味わっている様子が窺える。

(栄子)

入選 花の雲大道芸の真顔なる

芹橋二丁目 大野 ゆう子

(評) 桜花爛漫の彦根を思い浮かべた。「花の雲」は、満開の桜の花が咲きつらなあって、雲の様に見える事を言う。
大道芸にもいろいろあるが、楽しくおしゃべりしていた顔が芸を始めた途端、真剣そのものに変ったのだ。表情の機微をうまく捉えている。

(栄子)

入選 あやふやな九九の七段山笑う

東近江市 福澤 啓一

(評) 謎のような「あやふやな九九」という表現が魅力です。子供であれば、苦手な七の段が言えないこと。大人では、そろそろ物忘れが多くなつたなと思うことかもしれません。「山笑う」が作品を明るくしています。

(幸司)

佳作 鋤き込むや春の光と心意気

開出今町 西崎八重子

佳作 伊吹山晴れて湖北路風光る

地蔵町 佐古徳子

佳作 天心に城を遊ばせ月の宴えん

城町一丁目 北村天子

佳作 浮生なる相とて春の朝寝かな

稲里町 野瀬善一

佳作 八荒の波川尻を遡る

米原市 成宮義雄

佳作 川幅をぐんと広げて雪解水

中藪町 本田伸一

佳作 梢射す寒月庭に影を生む

大藪町 柳瀬宏子

佳作 春の風新生活に夢乗せて

開出今町 沢田初枝

佳作 滴りのごとくぽつりと言ふ本音

外町 知田照子



《総評》

今回の応募者は激減しました。残念です。どんな訳があるのか。よく考える必要があります。

さて、俳句はある意味長屋文学だと思えます。十七音の短詩に笑いや悲しみの人情や自然の美を拾います。

彦根には蕉門十哲の一人森川許六は彦根の藩士で多くの俳句が残されています。そのような偉大な俳人の句に学びながら私たちは優れた作品を生み出していきたくと存じます。

滋賀を取り巻く太湖、緑豊かな彦根城、北には霊峰伊吹山、東に広がる田園、句材は尽きません。さあ、みんなで紙と鉛筆を持ち、彦根の町を歩きましょう。皆様とどこかでお会いすることを楽しみにしております。

秋 口 大 門

今回は、応募の人数が減少しましたので、句数も減りました。しかし、風景を詠んだもの、日常生活の機微を詠んだもの等、内容的には充実していたように感じました。

遠くまで行かなくても詠む材料は見つけられますので、また一年間がんばって作句していただきたいと思えます。そして、一人でも多くの方が応募して下さるのを、期待しております。

北 川 栄 子

応募作品は、日常のある日、ある時を丁寧に俳句としてまとめていて印象に残るものばかりでした。作品に向かいながら、「季語の活かし方が上手いな」「この語句がいいな」等とつぶやくことが多くありました。

俳句は十七文字という約束があります。伝えたいことの全てを説明することは不可能です。言いすぎないことが大事です。

特に印象に残ったのは、想像を膨らませる手がかりになる言葉に出会えた作品です。

吉 永 幸 司

選者吟

萩月や絵図の戦に「井」の御旗

秋 口 大 門

磐座を仰ぐ裾野の草青む

北 川 栄 子

飛花落花迷わずに来て城仰ぐ

吉 永 幸 司

短歌

河分 武士
澤 絢子
宮本 照男
選

特選

初孫^{ういまご}の央太郎^あ生るガザでなく
ウクライナでもなきこの国に

日夏町 石原不二子

(評)

最愛の初孫の誕生を家族で祝う情景が浮かぶ。ふと心を過ぎるのは、もしもこの子が戦闘の続くガザやウクライナに生まれたのであったならどんなにか不安と慄きに晒されることだろうか。平和なこの国に生まれて本当に良かったと、戦を怖れ、平和を願う心の内がよく解かる。

特選

公園のばら繚乱のシンフォニー
指揮者のごとく噴水ゆれて

中藪町 山川美江

(評)

公園には大輪小輪数多のばらが、色鮮やかに咲き誇っている。その多彩な繚乱をシンフォニーと、独自の着眼をしたところが秀逸。指揮者を噴水とし一首の核にしたのも的確。花の王と言われるばらの繚乱とシンフォニーが、詩情豊かで読者を魅了する。

特選

病む足を擦り鎮めて雪掻くも
掬いよろけるもうすぐ卒寿

芹橋二丁目 古池陽彦

(評)

冬場の雪掻きの実情を上句に淡々と詠みながら卒寿の結句に深刻な生活が思いやられる。危うい力仕事の動きに応じた啓示のような動詞表現がより現実味を増してくる。社会性も含んだ一首となった。巧みな構成である。



入選 絵筆とりお喋り笑うひと時を

色紙に描き思いふくらむ

日夏町 津野幹子

(評) 高齢者の集う「お喋りの会」は日頃の思いを語りあい、発散する絶好の機会となつてゐる。そこで感じた印象を絵筆を持つて色紙に描くという。その色紙を見ればまた話題が一段と膨らむ、憩いの様子が的確に詠われている。

入選 並び立つ老杉のシルエツト染め上げて

茜ひろがる産土の杜

犬上郡多賀町 木村正子

(評) 並び立つ老杉のシルエツトから周囲の景観を鮮やかに浮かばせ、茜ひろがる産土の杜へと焦点を絞り込んでいる。この構想により産土の杜の荘厳さと同時に、守り神への深い愛着を醸す一首となり効を奏している。

入選 廃校の校門もんに新学期児童こら見え

侘したたずまい桜吹雪舞う

長浜市 小谷敏夫

(評) 作者が育つたのか、先生として通つたのだろうか、懐かしの校舎が、今では少子化の為に廃校となつてしまつた。新学期になつても児童の姿の見えない校舎には桜吹雪が舞うという。寂しさが漂う。

入選 バスに乗り昔の僕に会いたくて

峠越え行く芹谷分校

東近江市 藤本修

(評) 二句、三句の「昔の僕に会いたくて」の力みのない素直な表現が下の句へ昇華させ結句の芹谷分校の存在が明らかになつてくる。人生の後半生の感傷的なころの動きを伝えてくる。

入選 老いてなおときめき覚ゆ悩みたる

短歌うたの一首の立ち上がる時

日夏町 寺村享子

(評) 作歌する時には、題材・構想・表現・リズム等に苦勞し悩むことが多い。しかしその辛さや苦勞を乗り越え一首が完成すると、心を満たすときめきが湧く。作者の意欲や真摯な姿勢がしみじみと詠まれており、作歌する人の共感を呼び励ましともなる貴重な一首。

入選 夫送る柩こしに入れるコートのポケットに

残るチケット二枚

本庄町 田口洋子

(評) 今までの想いが一気に湧き上がつてくる見送りの場のコートのポケットに思いがけないチケットが残つていた。どんな想いでそのチケットを持っていたのだろうか：夢、現を交差するかのような結句の存在が重い。

佳作　をちこちに桜咲けども一番は
君とはじめて見たこの桜

東近江市　坂口靖子

佳作　また震^{ふる}う指先しかと宥^{なだ}めつつ
娘の幸願^{ねが}い雛飾^{ひな}り終^おう

古沢町　野洲康雄

佳作　羽根の艶ふかめて鳩は巢^ねづくりの
身丈をこゆる枯草はこぶ

西今町　松本トシ子

佳作　今日咲くか明日は咲くかと見上げおり
年追うごとに桜を待てり

犬上郡豊郷町　森　典子

佳作　袖通す母縫ひ呉れし半纏に
とうに齡を過ぎたる今日も

米原市　奥村和子



《総評》

今年の市民文芸は、例年になく作品が減少しました。思い当たるのは新たに出品料が制定された為かと思われます。出品された方には手続きに手数をお掛けいたしました。

出品者二十五名全員の方が、出品規定に定められた三首ずつを応募され、文芸を愛する熱意に安堵いたしました。

作品は多岐に渡り、心に響くものがあり、嬉しく拝見いたしました。

短歌は、みじか歌ですが古来より続く伝統ある文芸です。今後も皆さんの短歌が読む人に感動を与え、心に沁みる宝石のような作品に出会えるように期待しております。

河分 武士

第六十一回彦根市民文芸作品に接する機会を賜り、その偉大な歩みに感動と賞讃が込み上げて参りました。

短歌の応募者数は減少していますが、練り上げられた格調高い作品ばかりで、何度も熟読し選歌させていただきました。内容的には、家族や地域の絆、四季の景観や趣味等が多く詠まれています。さらに今年は生き方や社会への念も多く、生活に深く根付いていることを実感しました。今後も市民の皆様のご健詠により彦根市民文芸が、心の財宝となり発展しますようお祈り申し上げます。

澤 絢子

今回も印象に残る作品を数多く拝読でき選歌は尊い時間でした。一方、苦渋の決断を迫られる味わい深い歌もありました。寄せられた短歌にこもる人生の重なりと熱量に感動を覚えました。病棟や介護の施設にありながらも生活のリアリティを詠んだ短歌も見受けられました。繰り返される日常の目の前に景や今ここで起きている現象を「二期一会」の新鮮な気持ちの感覚で向き合うことが理想かと思えます。いつもより多彩な印象を受け好感を持ちました。

宮本 照男

選者吟

琉球王朝の末裔という井伊夫人

ひこにゃんの街彦根の母なり

河分 武士

朝影の季の舞台で共演す

八重桜の紅・花水木の白

澤 絢子

濠べりの櫻あじさい入れ替わり

急ぎし季節とぎの花の生涯

宮本 照男

川柳

重森恒雄

峯 裕見子

選

特選 雨傘の下が私のテリトリー

大津市 金子純子

(評) ちょっと狭そうだけど丁度良い。移動もできるし、いい人が入ってくれることもある。などと言うのは表の意。実はもっと良い場所に陣取り、より大きな傘を広げるのだという隠れているたたかさを感じる。
(恒雄)

特選 アク強い春をしたたか老いてゆく

犬上郡多賀町 清水容子

(評) 春野菜や野草にはアクの強いものが多い。苦みがあったり調理の過程で指を黒く染めたりするのもそのせいだろう。作者は自分の中のアク(しぶとさ)に気づいているようだ。「それがどうした」という声も聞こえるようで、あっぱれな「老いぶり」を感じさせる。
(裕見子)

特選 ガチャガチャから私わらって出てきます

新浜二丁目 森口ゆめみ

(評) ガチャガチャから出てくるものは運命的で、自分ではコントロールできない。親ガチャは親を選べないことを言うのだろうか。何であれ私は笑って出てくるのだ。親も子を選べないのだ。仕方ないのだ。
(恒雄)

入選 何としても帰ろ帰ろねおとうさん

地藏町 大谷のり子

(評) この切迫した感じは何だろう。どこから帰ろうと言っているのだろう。弱り切った人を抱き起こし歩かせようとしているかのようだ。「何としても」の強さはもちろん「帰ろ帰ろね」のリフレインには痛みがある。
(裕見子)

入選 バスに乗り食べるつもりパン一つ

正法寺町 金子君子

(評) バスに乗ったら食べようと、菓子パンを一個バッグに詰める。本当はすぐにも食べたいところだが、バスに揺られ、景色を楽しみながら食べるのは、きつと旨いに違いない。今は我慢だ。バスは来るのだろうか。
(恒雄)

入選 やさしい嘘ふえてゆくのね年重ね

大藪町 小南苑子

(評) 自分が他者につく嘘もあり、他者が自分につく嘘もある。また、自分が自分を納得させるための嘘も無いとは言えない。現実の厳しさを和らげるのは嘘しかないのかもしれない。それを受け入れ他人の静けさを感じる。
(裕見子)

入選 飲みかけのビール残して友帰る

東沼波町 野口博子

(評) 友が帰った部屋に寂寥感が漂う。飲みかけのビールは何事かがあったと訴えている。もうここには来ないと言い残して、「友」が出て行ったのだろう。いつも残される側は悲しい。
(恒雄)

入選 春をぬくゆっくりやさしく根っこまで

犬上郡甲良町 川口利江

(評) 長イモだろうか。丹精込めて育てた長い根っこを折ってしまわないようにゆっくりやさしく抜けば、待ちわびた春が全部手の中にある。春をぬくという表現が上手い。

(恒雄)

入選 ルンバ君ダンスしないで掃除して

大藪町 千葉春胤

(評) ロボット掃除機は床に物があったりするとセンサーが感知して微妙な動きをするらしい。それを「ダンス」と言い、人間に対するように呼びかけている作者。十七音字に無理がなく、リズムと明るさがある。

(裕見子)



佳作 紅色の夢をまだ追う余命表

米原市 西尾辰之

佳作 リハビリ送り出しうんと伸びをする

大津市 中島順子

佳作 バス停に座布団残し亀急ぐ

大津市 谷 優

佳作 懐かしい町歩きたく車降り

鳥居本町 谷口繁子

佳作 「風」歌う君のギターと楽々園

東近江市 大橋定嗣

佳作 飛魚は悔し涙を流さない

甲賀市 綾口千晶

佳作 もう一度やり直したいあの場面

近江八幡市 西村孝子

《総評》

選者の一人だった、青木十九郎さんが選を降りられました。今回で六十一回目の市民文芸では、大変永きにわたりご尽力された選者でした。彦根市の川柳部門にとって一時代が過ぎていくことになりました。そういう時代の変化もあつてか、投句数が昨年よりも随分減りました。寂しい市民文芸となりましたが、新たに投句していた方もあり、いい句も多数ありこれから、川柳という文芸を、つないでいきたいと思います。

来年もよろしく願っています。

重 森 恒 雄

川柳は、たやすく作ろうと思えば作れてしまう短詩かもしれませぬ。新聞の見出しのような句や交通標語みたいな句も十把ひとからげに川柳と呼ばれているのが現実です。

しかし、あえて大まかに定義づけるとすれば、川柳は根本に批評の精神があり人間そのものを詠む文芸です。また、その柱に据えるのは「私」です。「こうありたい理想の自分」を書いてもいいのですが、「こんなふうにしかな生きられない自分」でもいいのです。

激しく動き変化する時代の中で自身を含む人間を見つめ、ユーモアを忘れず、ことばに敏感でありたいと思っています。作品を寄せてくださった皆さんに感謝を。

峯 裕 見 子

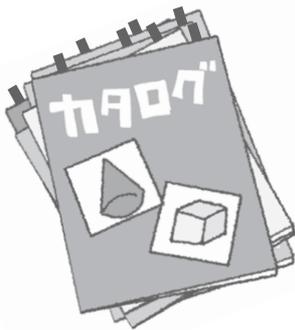
選者吟

欲しい物ばかりのカタログが濡れる

重 森 恒 雄

ざらざらの石に刻んである一句

峯 裕 見 子



冠句

小森和美
田中二天
西村吟雪
選

特選 値が上がる 買わずに帰るこの辛さ

大藪町 千葉 春胤

(評) 米5キロ四千元。一万円で買える米12キロ、半月分。やりくり母さんも万策尽きる値段です。

特選 値が上がる 生きねばならぬしぼる知恵

田附町 大谷 みつ子

(評) 世の中に物があふれ豊かになった気がしていたのに、泡が弾けて、心の貧乏に気付く。工夫して生きることが豊かな生活なのだ。

特選 一昔 日記ときどき暴れ文字

長曾根南町 高 惠三郎

(評) 感情に押し流されてペンを持つ手もつい疎かになり、習慣付いたる日記も文字が乱れがちに。若い頃はとかく冷静さを欠いたものである。読み返すと情けなくなる。落ち着こう。

入選 一昔 ダイヤル回わす黒電話

長浜市 野口 成人

(評) 世は日進月歩の情報通信革命。一分一秒を誰よりも早く争う日々の活し。あの重くてでかい緩やかに戻るダイヤル、ツウツウと音がなつかしい。現在では待ちきれない。でも通話は出来るそうです。

入選 焦がれ行く 野球に夢を追い求め

米原市 成宮 義雄

(評) この人はどこのチームに入ったのだろうかと思いを掻き立てます。ベンチ入りしなくても、背番号が貰えなくても、きつと青春の思い出は美しいものとなって残っていると思います。

入選 一昔 母が鶴折る薬包紙

新海町 木村 美波

(評) お医者様から処方される薬が粉薬で、看護婦(※)さんが紙で包んでいた時代は遠い昔になりました。腹痛でも風邪でも、いつも同じ胃散が処方されるのによく効く。でも、母が隣で鶴を折っているとは、少し心配です。(※) 時代背景を考慮した表現による)

入選 焦がれ行く 次よ先輩オクラホマ

犬上郡豊郷町 伊香 とし子

(評) 青空の下、握った手の温もりが忘れられない。ドキドキする胸の高鳴り、良き青春時代の淡い初恋が甦る。どうか曲が終らない様に念じつつ待ったあの日の思い出が。

入選 一昔 対面レジで和やかに

普光寺町 河合仙治

(評) 店と客が互いに声かけ合い、人と人との対話。今では買物とは何か、レジの画面を相手に支払い、それもカードで済ます。確かに早いし合理的ですが、何か物足りない一抹のさびしさを味わっています。



佳作 値が上がる 半片ずつの焼さんま

愛知郡愛荘町 西村芳子

佳作 一昔 孫と手繋ぐ爺の居て

地藏町 佐古徳子

佳作 値が上がる 軌道を正す民の声

東近江市 村上 定

佳作 一昔 アツという間に皺が増え

犬上郡甲良町 上野初子

佳作 一昔 少年達の夢の跡

稲里町 覇流 不良者

佳作 一昔 張り合う自我の古き恋

宇尾町 金森光男

佳作 焦がれ行く 住み慣れた町老いて尚

蒲生郡竜王町 苗村厚子

佳作 一昔 子らが巣立って広き部屋

大藪町 外村輝夫

佳作一昔 子孫の晴れに苗木植え

犬上郡豊郷町 伊香信章

佳作一昔 額の傷は今ほ笑み

正法寺町 菅野哲郎

《総評》

彦根市民文芸冠句投句者の皆様、こんにちは。

今年度は、小森和美先生と田中二天先生とで選をさせていただきました。今年度は昨年度より投句者が減少しました。これも後期高齢化に伴い、他の短詩文芸にも見られます。

投句は減りましたが内容は濃く甲乙つけがたく、三名頭をひねりながら選をさせていた、良かったです。特に「値が上がる」の題に対し投句の多くが、当世の米価を詠んでおられるように思います。

高齢化と申せど頭の体操に次年度も多くの句を詠まれます様お祈りいたしております。

西村吟雪

選者吟

焦がれ行く 晩花詩泉の歩はゆるり

小森和美

値が上がる 選良の弁空を切る

田中二天

一昔 スマホ無くても生活出来

西村吟雪

詩

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

特選

色のない景色

東近江市
叶葉湖

病室の窓

朝の道路

流れる

白 白 白 黒 白 赤 白
黒 白 黒 白 白 水色
白 白 赤 白 赤 白 黒

日勤の職員

満車の駐車場

並ぶ

白 白 赤 黒 白 黒 白
黒 黒 白 青 白 白 黒
黒 銀 白 白 赤 黒 白

私の血液

昨日の結果

考える

白は白血球

赤は赤血球

水色は血小板

黒はがん細胞

赤 白 白 黒 白 水色
白 黒 黒 白 黒 黒 白

黄色

突然アオジが目の前を遮る

つまらないことを数えるのは

もうやめなよ

医者たちが部屋をノックした
窓辺の椅子からベッドに戻る
リンパ球がはじまる
丸めた背骨に刺さる針
横目に見上げる空は眩しい

目を落とした鉄柵に
黄色
もつけない

(評) 作者は病室の窓から道を走る車の色を静かに数えている。そこから自身の血液の状態を連想していくが、一瞬遮った黄色いアオジは作者の想いが映された幻の希望だろうか。淡々とした筆致の中に、作者の哀しみや不安や決意が鮮やかに描かれていて惹き込まれる。



特選

雨の日

東近江市

前川利孝

夜からの雨で

朝は庭の緑が一層濃くなつた様だ

わたしは気分の落ち着く雨の日が好きだ

どこに出ても何をすることも出来なくなつて

自分の部屋にこもる

本棚からわたしを取つて読んでくれと

盛んに語りかけが聴こえる

思い立つて

雨の中傘をさして歩いてみる

雨音が傘につぶつぶとぶつかり長靴を濡らす

屋根に降つた雨はトコを伝いながら水を吐く

路や川や山が洗い流され清潔になる様だ

水田に蛙が鳴き出した

みんなが喜んでいる声に聴こえる

遠い昔

ひどい雨が続き近くの天井川が氾濫した

堤防が決壊して濁水がムラを襲つた

どんだん水かさが増えて来る脅威

我が家は少し高台の為床下浸水で済んだが

隣近所で床上まで被害の出た家も多かった

今でも雨が続くところの時の幻影が頭をかすめる
対策をとられここ五〇年程は何も起きない

その時代

川は自然に流れ

雨を受け止めて川を形成していた

稚アユやフナが泳ぎ

川の脇にはどじょうやナマズが棲んでいた

氾濫はなくなり人工的になつた川には

たまりにメダカが棲むだけとなつてしまつた

進歩と片づけるには寂しい気持ちが残る

わたしは黙つて雨の下を歩く

(評)

雨の日の様子を丁寧に辿る現在から、過去に出会つた災害の記憶、懐かしい魚たち、そして未来の危惧へと繋がっていく。どこまでも静かに語り続ける控えめな表現に、あらためて作者の考え深さが伝わってくるようだ。



入選

春の陽

正法寺町

高井豊

空がボンヤリ青くなつた

日の光が瞳を射る

まぶしい明るさに

思わず瞳をとじる

灰色の海に亡霊を浮ばせ

枯れた頬に

雪の涙をホロホロこぼした冬よ

しかばねのように

黙つた思い出よ

怠慢の中で

くずれた偶像よ

皆 さよならだ

胸を張つて背伸びをする

こうして

明るい光の渦の中に立っていると

私の中に舞い戻ってくるものがある

あたたかく湧き上がってくるものがある

すなおに振り返つて

「ありがとう」と言えそうだ

(評) めぐつて来た春の中に自身が存在していることを、抑制の効いた詩的な言葉で描いている。再生への喜びに感謝が伴うのは、長く生きてきた人だからこそその感懐だろう。

入選

古い

西今町
やまかみまさよ

このごろ ふいに呼び止められる
昼下がりの買い物の中に
私の目の前を しらん顔して急ぎ足で
通り過ぎる客達の流れの中、おいと

慣じみの店だから

いつになく野菜達をじつとみていて
私に声かけたのか 目くばせてみたが
キュウリも白菜も ツンとしてそしらぬ顔

買い物メモ書きを しまい忘れ

袋をゴソゴソ探している

今度は肩を つつかれたような、おいに
大慌てして 袋を落とす

ちよつと低目の心地良い響きがして

物静かな音に 足が止まる

AI掃除機がさりげなく

私を上手に さけて通る

イラッシャイマセとささやきかけながら

いつか どこかで であつたあの子に似て

(評)

軽妙な語りかけの中に、すべての存在への慈愛の気持ちを感じられるのはなぜだろう？
生きるということ、老いるということを受容するその心映えが、さりげない書き方の中で活き活きと動いている。



佳作

走音に 魅せられ

古沢町
真野美栄子

佳作

なにが 好き

須越町
疋田浩二

佳作

笑顔の贈り物

愛知郡愛荘町
小野崎成人

《総評》

昨年九十二歳で亡くなった谷川俊太郎は、二十二歳の時に「二十億光年の孤独」で鮮烈なデビューをして以来、幅広い読者を長く魅了し続けてきました。八十八歳(米寿)で出した詩集「ベージュ」も、老いていく日常を、深い自然へ回帰していくひとりの人間として、分かりやすい言葉でさりげなく描かれています。円熟と新鮮さを同時に感じさせるのは、さすがです。

ナラティブという言葉があります。「物語」と解釈するのですが、ストーリーが物語の内容そのものを指すのに対して、ナラティブは語り手によって視点や解釈、意味づけの違いがあることを大切に、語り手と聴き手が呼応しあいます。医療や心理学でも取り入れられているようですが、詩作も、数人居れば数通りの、百人居れば百通りの感じ方や意味を持つています。そこにこそ詩の持つ本来の面白さが現れ、どこにも正解などを探す必要はありません。今回参加してくださった作品にも、それぞれの個性を豊かに感じるものが多かったように思います。これからも、読み手との呼応や共感を大切に、自分ならではの感性で書き続けてくださいますように。

尾崎 与里子

選者吟

風のはじまる

石内秀典

タンカーの船長だった彼は
穏やかに眼を閉じていた
一等航海士の白い制服が
畳まれて胸の上に置かれ
棺にはむせかえるほどの
花が手向けられ
キャプテンと刻印された名札が見えた

朝風は

陸軟風から海軟風に変わる境で
始まる

外洋からの

長い航海を終え
瀬戸内の母港にかえってきた彼

凧ぎの始まる予兆を
襟立ててながめた

その表情のまま
静かに漂うだろう

時は明らかに止まり

周囲の人達は

一瞬のうちに彼を去って行く

他人の記憶は決して共有できない

我ら

異境の港での

幾多の記憶や

海水で満たされた

自分の身柄を

彼はどのように流れるのか

森の約束

尾崎 与里子

三方を山に囲まれて

ゆるやかに柵田が続いている

道沿いの小屋の前に干されている鹿の皮

移住してきたポーランド人の猟師が

数日前に獲った鹿だ

敬虔な方法で森の神に感謝を捧げ

丁寧処理された

鹿皮を革にするためには これから

いくつもの工程を経なくてはならない

皮についた血や肉を丁寧に取っていく

血や肉は異臭を放ちながら皮を腐食させ

もう一度

生きているものに戻ろうとするから

くり返し薬剤に漬け 水で洗い

力を入れて皮を擦り伸ばし

また薬剤に漬け 水に浸し 乾かし

我慢強く鞣すという工程を経なければ

人に添うものにはならない

留美子さんはさつきからずと力を込めて

皮を擦り伸ばす作業を続けているが

風邪気味なのか少し咳をしている

友人からブレームンのお土産にもらった

可愛い縞柄キャンディーを

留美子さんにお裾分けする

手で触れると 鹿の斑点は想像より大きく

毛は長くて硬い

今日も村の奥の谷底には鹿の遺骸が

積み上げられていく

冬の風が

山から吹き降ろして

斑の毛皮が静かにゆれている

あかあかと大きな

山本英子

鹿の大きな濡れた瞳に映る

自分自身に見つめられた時から

私は冷たい石の降る街を歩く

人はあるいは獣 けものは人の姿で

生きているのかもしれない

走る豹 立ちつくす冷羚 静かにふり返る狼

摘みきれないたんぽぽの野で

夕陽まみれのまま抱き上げられた

こぼれあふれ散るまばゆさの中

あかあかと大きな すがた かたち

いつか私も歩みゆくはるかの日

咆哮を噛み殺しながら

見知らぬ子をきつく抱きしめるのだろうか

女の子が見たこともない獣の姿で



随筆・評論

竹中圭子
藤本弘子
山口一選

特選

叔父の遺したもの

平田町
伊藤眞雄

今から六十年程前のこと。私が小学校六年生の頃に生家の裏手にあった、大きな蔵に入ったときの記憶が今も鮮明に蘇ってくる。分厚い頑丈な扉を力を込めて右へゆつくりと開けると、中は薄暗く、冷気が漂ってくる。二階の狭い格子戸から差し込む光を頼りに中を見ると、幾つかのタンスや長持ちが所狭しと置かれている。入り口のすぐ右側の勾配の急な、狭い梯子段を一歩ずつ上がっていく。階段を上りつめたすぐ左手に両手を広げたくらいの木箱が目に入る。蓋を持ち上げて、中を見ると、多くのノートが束ねてある。ど

れも黄ばんでおり、一番上の一冊を開ける。黒インクの文字がビッシリと並び、何が書かれているのか分からないが、私はそこに現れた文字の美しさに惹きつけられた。ページ全体が整っているのである。ページをめくると所々に定規で引かれた図形のようなものもある。それを閉じ、他のノートにも目を通すが、どれも同じく丁寧に書かれた文字が飛び込んでくる。

その夜、私はそのノートのことを父に話した。父は、「それらは、お父さんの弟が勉強に使っていたものだよ」と誇らしげに言った。

さらに、二十年前のこと。父は亡くなる前に家族のことを一冊のノートに残していた。私は『父の手記』と題し、家族や親戚に配った。その中に、叔父のことが書かれている。「私が六歳、弟が三歳の時であった。弟は突然倒れて手足を震わせ、身体を動かすことができなくなった。近くの薬局の方が、京都大学付

属病院を紹介してくれた。父はそこへ弟を連れて行くと、医師から『小児麻痺』と診断され、完全に治ることは難しいと言われた。父母は藁をもつかむ思いで、神仏にすがった。地元の宗教家の指示に従って家の井戸を清め、母は雨の日も雪の日でも朝晩二回、近くの神社でお参りを続けた。

一年後、弟の病気は回復し、元通りの元気な身体になった。家族で涙ながらに喜んだ。その後、弟は大垣第二工業高校を卒業し、上野原電力区に勤務した。適齢検査甲種合格後、戦車隊兵として九州久留米隊に入隊したものの、最後はサイパンで戦死した」

また父は、別の所で次のように記している。「父は弟が陸軍中尉で名誉の死を遂げ、三歳の時の大病が治癒でき、立派にお国の役に立ったとはいえ、帰らぬ人となったことで隠せぬ寂しさを味わっているようでした」

私はその叔父に会いたかった。あのノートのこと、病気の奇跡的な治癒のこと、いろいろな話を聞きたかった。叔父がなぜサイパンで死ななければならなかったのか、そのことを調べずにはいられなかった。

太平洋戦争は一九四一年十二月八日、日本の真珠湾攻撃で始まった。その後、日本は南へと侵攻したものの、次々と壊滅させられた。一九四四年六月、日本はマリアナ諸島での

攻防戦で大打撃を受けた。米軍はその勢いでサイパンに侵攻。六月半ばに米軍は上陸し、七月七日、必死の抵抗を続けていた日本兵の約三千人が最後の総攻撃の末に「玉砕」した。

七月九日、サイパンは米軍に占領され、最北端のマツピ岬に追いつめられた兵士や民間人は「天皇陛下、万歳」と叫び、次から次へと身を投げたという。現在、「バンザイ・クリフ」と呼ばれ、有名な観光地となっている。このサイパン島での死闘で、日本軍の約四万一千人、島の民間住民の約一万人、さらに先住民の約千人が命を落とすとある。

当時、「死して罪過の汚名を残すことなかれ」という戦時訓が日本兵の誰にも植え付けられ、投降し捕虜としての生きる道は閉ざされていた。また、「玉砕」は当時の大本営が造った言葉で、そこには潔さや自己陶醉だけがあり、戦死をも美化していたのだ。

叔父の死後、今年で八十年が過ぎる。

故郷の墓地には、先祖代々の墓の隣に、叔父の名前と「陸軍中尉・昭和十九年七月十八日サイパン島にて玉砕」と銘打った墓がある。だが、そこに叔父の遺骨はない。今もサイパンでひっそりと埋もれているのだろう。

先日、生家に住む兄に電話し、蔵や叔父のノートのことを尋ねた。「蔵は解体し、中にあった物はすべて処分した」と言う。私は、

何か寂しさを感じずにはいらなかった。

生家の仏間には叔父の遺影が掲げられている。叔父の姿は若々しく、軍服姿であるためか凛々しい。それでいて、微笑んでいる。

世界では多くの若い兵士をはじめ、民間人が戦争の犠牲になっている。戦争は家族をはじめ、多くの悲しみをもたらすだけである。

私は叔父が遺したものを忘れず、ここに一つの記録とする。これを後世に伝えていくことが、私の今の使命であると思っている。

(評)

亡き父の手記に綴られた、サイパンで戦死を遂げたという叔父の生涯に触れ「会って話したかった」という作者の叔父への深い敬愛と哀悼の想いを軸に、時代の流れとともに風化されつつある戦争の悲惨さを世に伝え残したいと願う作者の思いが伝わる力作。

入選

郷愁

大 藪 町
柳 瀬 宏 子

一枚の古い写真がある。父方の祖母とその妹である母方の祖母を中心にした血縁者の集合写真で、父方の祖父は、黒船来襲に四年先

立つ嘉永二年の生まれで、既に他界。若き日の父と母の姿もある。

私はその写真が撮られた、母の姉の家の敷地内で、五人姉姉の末っ子として終戦の翌年に生まれた。長兄とは十九才離れ、すぐ上の兄とは十才違い。従兄弟達は叔父叔母のような年齢で、私は大人の中で育ったと言える。ここでは三才近くまで過ごした。

自分と言う者を意識し始めたのは、五才の頃だったろう。母に詰めてもらった誕生祝いの赤飯を片手に、もう片方の脇にくると巻いた筵を抱えて、移り住んだ市営住宅の前に広がる原っぱに向かって歩いて行った。

広大な原っぱとその向こうに広がる海に、一抹の不安を抱いたか、家の方に向かって膝頭をきつちり揃え赤飯を食べた。ただそれだけの事だったが、振り返れば、それが人生への船出の儀式だったように思う。この戦後の急増の市営住宅には、種々雑多な職業の人々が風に吹き寄せられるように住みついた。

漁師の一人は小柄な好好爺で、友達と私の首を掬い上げる様に持ち上げ「東京見えたか。」と言って、幼い私達をゲラゲラ笑わせた。東京は愛媛の小さな町に住む人々にとつて遙か遠い場所、憧れと怖れをもって語られた。テレビはまだ無く大人達はラジオや新聞

を情報源とし、子供達は漫画や雑誌に夢中だった。

貸本と駄菓子屋のおじさんは、商品を並べた一畳きりの板間の端に座り、口をへの字に曲げ、目だけはギョロリと下に向け、子供達がズルをしないかとしつかり見張っていた。

斜め裏のおじさんは、豆を炊いて行商に出ている。台所の板間にはボウルに真っ白な砂糖が山のように盛り上げてあった。当時サツカリンが安価な甘味料として使われていた中で、その白さが眩しかった。

住民の中には中学校の教師や娘と同じ小学校に勤める教頭先生もいた。ある日その小学校で、虱対策として新一年生の私達の頭に農薬のDDTが吹きかけられた。皆の頭は白い粉だらけになったが、女の先生は同級生の彼女の頭には、少ししか吹きかけなかった。

銀行勤めの父の許に、住民のおばさんが通帳とハンコを持って来て、お金の引き下ろしを依頼し、見ていた私をびっくりさせた。

食糧不足を補うため、あちこちの家で鶏を飼っていた。父の友達が、「食え。」と言ってくれた若鶏は、若沖の画の雄鶏のような見事な鶏冠を持つ成鳥に育ち、ある日、時ならぬ鳴き声をあげた。一個の大きな卵が産み落とされていた。私は掌に仄暖かい卵を載せて、八百屋に出かけた母の許に走った。初めて、

命の温みを肌で感じた出来事だった。

スーパ―等は無く、母親達は籠を下げて、近くの八百屋や魚屋で買物をした。八百屋の店先には、じゃが芋や玉葱の入った木箱が並べられ、後の壁には映画やストリップシヨウのポスターが堂々と貼られていた。

当時の生活圏は狭く、人々の楽しみも地域の中に限られていた。冬の夜には互いの家を訪れて、百人一首に興じる事もあった。子供達は、大人達の暮らしの憂いをよそに、近所の庭先を駆け回り、海に川にと遊び回った。

当時の人間が全て善良という訳ではないが、少なくともプライバシーという鎧に身を固め、予測不能な犯罪に身構える必要はなかった。誰に憚ることなく人に親切を施し、素直に人の親切に感謝できた。

やがて暮らし向きが落ち着くにつれ、苦境の中で身を寄せ合って暮らしていた住民達はそれぞれに暮らしを求めて去って行った。

故郷を離れて数十年。その間海への想いが消えることは無かった。ついには海や川が頻りに夢の中に現れるようになった。そこで、私は姉夫婦の七回忌と先祖の墓参りを機に、自分のルーツ巡りをするを思い立った。

卒業した小中高と見て廻り、思い出の海を臨む川裾の橋に立ち沖合を眺めた。そこにはいつも心に浮かんでいた牧水の「白鳥は哀し

からずや…」の景色―対岸の島を背に鳴きながら高く低く飛び交う鴉の姿―は見えず、遙か沖合に新しい橋が架かっていた。歳月を経て同じ場所に立てた興奮と、現状を受容せざるを得ない軽い胸の痛みを同時に覚えた。

最後に、私は、あの写真の生地、心の中で回帰し続けたその地を訪れた。私の一方的な感傷と危惧しながら、子供の頃によく遊んだという縁を頼りに、四才年下の従甥に六〇年振りに再会した。

それは記憶の中の少年が、突如立派な成人男子として現出した様な、何とも説明し難い感傷と、先に逝った人々の後に一人残された侘しさを慰撫する様な陶酔感をもたらした。

手許には、迎えに来た私の家族と一緒に優しく微笑む一枚の写真が残り、元の海は穏やかに私の心を洗い続けてくれている。

(評)

一枚の古い写真に想起される幼い頃の作者の自我の目覚めの記憶や市営住宅に見る市井のひとびとの人情溢れる暮らしが、感受性豊かな子ども時代の記憶として綴られる。故郷を離れ暮らしていた作者は後年思い出の地に従甥を訪ね、記念に自身の家族と写真を撮る。読後の余韻が心地よい佳品。

思いもよらぬ交流

日夏町
田中恵子

新聞の読者欄に八十四歳の男性の投書が載っていた。

同窓会に出席するため、大阪から京都駅に降り立った彼は、会場への道順が分からなかった。駅付近は日本人より外国人の方が多いようだった。この人は地元の人かとも思っていて、通りすがりの若い女性に道を尋ねると、スマートフォンを取り出して調べて、

「次の角を曲った所ですよ」

と教えてくれ、さらに、

「私は韓国からの旅行者です」

となめらかな日本語で付け加えた。彼は驚いて、とっさに「カムサハムニダ（ありがとうございます）」と言っていると、彼女はにこっと笑顔を見せて去って行ったという。

私にも似た経験がある。

六年前のことだ。尼崎に住む娘と大阪駅で出会って、新歌舞伎座での、ものまねタレント、コロツケさんの公演を観に行くことになっていった。大阪駅で娘と会えさえすれば、

後は娘に付いていけばよい。私には大阪の街などさっぱり分からない。

JRの最寄り駅は河瀬である。駅が混雑していて驚いた。普通電車しか停まらないこの駅は、朝九時台にはいつも乗客はまばらなのである。

下りの電車が動いていなかった。昨日通り過ぎた大型台風のため、どこかに不具合が生じているらしい。駅のアナウンスがたびたび流れて、復旧がいつになるか分からないと詫びていた。下りの電車に乗って、草津で新快速に乗り換え、京都、大阪へと久しぶりの電車旅も楽しみだったのだ。

その日は空一面の青空で、澄んだ空気の中を背筋を伸ばし、めったに穿かないスカートの姿で駅まで歩いてきたというのに……。上りの電車は動いていた。右往左往している大勢の人の中から、「新幹線は動いているらしい」という声が聞こえた。新幹線なら米原だ。ここから上りで三つ目の駅。米原駅へ行ってみよう。

米原駅も大混雑で、新幹線の乗り場まで、上の方の表示板を見て矢印どおりに駆けていった。券売機の前で一息。本日指定席・自由席券と表示された券売機は二台あって順番を待った。上下線とも動いていた。

私の番になって画面をタッチした。駅名が

並んだ画面に変わり、大阪を探す。大阪がない。慌てない、慌てないと胸を叩き、目を見開いて、大阪を探すがやはりないのだ。「大阪、大阪」と、声が出てしまっていたのだろう。左の上の方から男性の声がした。

「失礼ですが、もしかして新大阪ではありませんか？」

「あつ、そうか。大阪には新幹線は停まらないのだ」

知っていた。だが、その時は完全に忘れてしまっていた。それまで新幹線に一人で乗ったことなどなかった。画面に新大阪はあった。タッチした。切符を手にすることができた。

そこで初めて左上を見上げた。

（あつ、外国の人や）

背が飛び切り高く、鼻の高い白人男性の笑顔があった。私はおおっと口を丸くしてしまった。

「あの……ありがとうございます」

「どういたしまして」

何と美しく優しい日本語だろう。

その人はさつと格好良く手を挙げ、広い背中を見せて立ち去っていった。

新幹線と在来線を乗り継いで、大阪駅に無事に着くことができた。娘にも会えた。娘は、「お母さん、なんとかして行こうと、自分で考えて行動できたね」

と誉めてくれた。

公演にも充分間に合った。コロッケさんの舞台に大興奮し、楽しい時間を過ごした。帰りの在来線はまだ乱れてはいたが、上下線とも動いていて、無事に河瀬駅に降り立つことができた。

ところで、例の投書の男性は、

「世間では観光公害と呼んで、マイナス面ばかりが指摘されがちだが、外国人観光客との思いもよらぬ交流ができてうれしかった」と結んでいた。

八十四歳の彼は立派である。韓国語でお礼を言った。

私もあの時、

「サンキューベリマッチ」

と言えばよかった。そのぐらいなら言えないこともなかったのに……。

あの日の外国人との思いもよらぬ交流は、私の嬉しい思い出として忘れられない。

(評)

大阪で娘と落ち合う日に琵琶湖線が運休してしまい急遽米原からの新幹線に変更したときの顛末を、新聞の読者投稿と重ねて綴るユーモラスな作品。オーバートリズムによるトラブルが取り沙汰される昨今であるが、思いがけず外国人との穏やかな交流を得たときの心の温かさが伝わる佳品。

佳作

花と蝶

大藪町
脇坂修身

佳作

一刻者の父の思い

大藪町
吉田和治

佳作

おしどり夫婦

高宮町
伏木いろは

《総評》

良い随筆を書くには「自分にしか書けないことを誰にでも理解できる文章で書く」ことが大切だといわれます。とくに今年度は、この根本を踏まえた完成度の高い作品が多く寄せられたように思います。どの作品も文章に気負いがなく、生活者としての素直な(かつ文芸的な)視点で日常が描かれていることに感銘を受けました。またそれぞれ深いテーマと作者の個性が感じられ審査はたいへん難航しました。そのなかでも上位入賞作品は選者の意見が一致していたこと、惜しくも選にもれた作品も例年ならば入賞していたレベルであり、僅差での結果であったことを申し添えておきたいと思えます。小説は創作された疑似世界を描き、随筆は身近な現実世界に筆を下ろします。そこに作者の個性として表れる文章の密度や速度、展開法のさらなる習得には、ご自身が懂れる作家やお手本としたい随筆やエッセイをいちど丸写ししてみるのもよい勉強となるでしょう。

山口 一

小説

井上 次雄
杉山 啓志
選

特選

該当なし

入選

該当なし

佳作

彼岸花の茂れる地

西今町
野村真吾



《総評》

小説部門の応募は一作品にとどまりました。審査員二名が真剣に読ませていただき、観点を変えながら協議をしてみました。その結果はご覧の通りです。

来年度以降、小説部門に応募される方が増えることを願いつつ、初めて小説を書こうとする方でも読者の心を動かさしめる作品に仕上げるコツを紹介して「総評」に代えます。

小説の要素は、①人物、②状況、③筋、の三つです。この三つが読者に生き生きと伝われば半ば成功です。

彦根市民文芸作品の小説部門の応募規定では、四百字詰め原稿用紙に換算して十枚以上、三十枚以内で書くことになっています。この枚数では、複雑なストーリーを展開するのは無理で、登場人物も数名に限られるでしょう。その条件の下で、あなたにしか書けない小説を書いてみてください。

とくに、主人公の人物像を造形することに全力を注いでください。その人柄が読者の脳裏に浮かぶように書き込んでみましょう。読者はその人物に感情移入して読んでくれます。

物語の語り手を誰にするか。作中人物のひ

とりが語る、という方法がよく使われます。漱石の『吾輩は猫である』では猫が語っています。作中人物ではない誰かが語っている小説もあります。小説の内容に合った語り手を決めて取りかかってください。

題材は日常のちよっとした出来事や、何気ない会話の中からも見つけることができまう。こんなことが起こったら面白いな、というふうな思いつきでも、じゅうぶんに小説の種になります。大事件が無くて、特にすぐれた人や奇人変人大悪人が登場しなくても、読者を楽しませる小説が書けます。作文のように、自分が体験したことをそのまま書くのではなく、虚構の世界を創ってください。

文章を書くにあたっては、平易で明快な日本語を使いましょう。「文学的表現」や「名文」が求められているわけではありません。「流石に」「専ら」など、今では一般的に漢字で書かなくなっている副詞があります。読みやすく書きましょう。

一文（センテンス）がだらだらと長くならないようにしましょう。長いと、伝えるべき内容や論点がぼやけたり、読者に無用な負担をかけた結果になります。

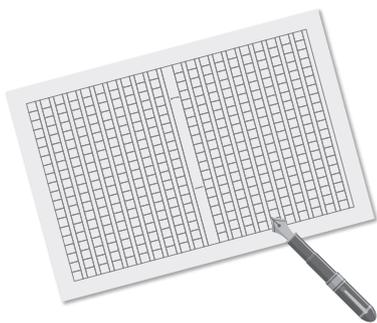
時間・場所・観点が変わったら、改行して新しい段落にします。このことは言葉では説明しにくいので、実際に一流の作家の小説を

読んで習得してください。新しい段落は一字分字下げします。

小説を書くうえでさらに大切なことは、あなたの小説を読んでもくれる人を常に意識することです。「思いのまま書きたいように書く」ではだめなのです。自分が書いていることが読者に正確に伝わり、読者の感情を揺り動かしているかどうかを、よくよく考えながら書いてください。思いついたことを書き手のペースで次々と書き連ねるのではなく、読み手の胸の心にしっかり届いているか、読み手の胸の中にちゃんと納まっているかを、いつも考えていてください。書き手だけが独走してはいけません。

以上のことを心のどこかに置いて、まずは一篇を書いてみてください。来年度のご応募を今から楽しみにしております。

杉山啓志



『あとがき』

今年度の彦根市民文芸作品の募集には、延べ百五十五人の方から、総数四百二十六点の作品が寄せられました。

昨今の本市における大変厳しい財政事情と併せ、受益者負担の適正化等を鑑み、今後の文化行政活動を継続していくため、今回、運営方法等の見直しを図らせていただきました。

こうした中、日頃から創作活動に励み、研鑽いただきながら、市民文芸作品の作品募集の機会に力作をお寄せいただき、事務局として心よりお礼申し上げます。

今後も、より多くの方にご参加いただける文芸活動となるよう、引き続き模索してまいりたいと考えております。

この機会が、創作活動の一助となることを願いますとともに、来年度もご応募いただけることを心よりお待ちしております。

最後に、入賞作品集の発刊に際しまして、ご指導およびご助言をいただきました選者の皆様をはじめ、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

彦根市観光文化戦略部 文化振興課

第61回（令和7年度）彦根市民文芸作品入賞作品集

令和7年 8月発行

編集・発行 彦根市観光文化戦略部 文化振興課

〒522-8501 彦根市元町4番2号

彦根市役所4階

TEL 0749-23-7810 FAX 0749-21-3080

